一一五　花百首詠草　菅沼守敬　天保九年　二冊

著者竝に他の人々の櫻に關する歌六十五首を集めたるものなり。

一一六　玉の枝　沙門映範序　一峨畫　一折

首に一峨の繪を載せ、沙門映範の序あり。人々の詠める花の歌三十三首を載せたり。

一一七　三河國衣乃里　艶櫻和歌集　初編　自樂庵道貴　嘉永七年　一冊

昔、三河の衣の里にありし香櫻に就て詠める歌を集めたるものにして、終に香木昔語りの圖を載せ、又詠歌者の姓名を列擧せり。

一一八　さくら山の歌集　片山高岳　慶應二年　一冊

長州赤間ヶ關の招魂場に植ゑられたる櫻に就て、當時の奇兵隊の人々の和歌を集めたるもなり。

一一九　閑居花　富永準清　元治元年　一冊

越後頸城の人富永春部の追悼歌集にして、櫻の歌二百五十五首を載せたり。編者の跋と詠者の姓名とを附す。

此花集は「簷の月花」と題せる歌集と合はせて二冊として刊行せり。

一二〇　花百首（稿本）　新居守村　明治十八年　一冊

櫻の歌百五十餘首を載せたり。守村の自筆なり。

一二一　かさしの花　野口正章　明治二十六年　一冊

著者の父柿村の七十の賀の爲廣く櫻の歌を募り集めたるものなり。終に壽筵

賀詩、出品目錄等を附せり。

一二二 花のうたかた 伊達宗德 明治二十六年 一冊

侯爵伊達宗城追悼紀念に集めたる花の歌なり。

一二三 さくら百首 藤田德次郎 明治三十年 一冊

人々の櫻を詠める歌を集めたるものなり。

一二四 昔の春 鎌田憲夫 明治三十七年 一冊

著者の母勇子の追善の爲に詠める櫻の歌を集めたるものなり。

一二五 和歌漢詩 櫻花百詠 元田直 大正四年 一冊

著者の明を失せる後に作れる櫻の歌及詩を集めたるものにして、詠櫻十二首、

名都櫻花四詠、舊都櫻花八詠、名區櫻八詠、東京名櫻八詠、西京名櫻八詠、其他種々の頭目の下に櫻花を詠せるもの多く、前後二編に分かてり。一々の題毎に和歌と詩をも載せたり。

狂歌

一二六 花ぐわし 狂歌堂眞顏選 北尾重政畫 寛政年間 一折

四十二の異なる櫻を單彩にて現はし、一々之に諸家の狂歌を添へ、終に名所の櫻の狂歌十餘首あり、眞顏の序と錢屋金持の跋あり。櫻の圖は概ね櫻品より取れり。

一二七 三才花百首 六樹園選 北溪畫 一冊

六樹園の序、北溪の朝日の櫻、水邊の花、花見の櫻の口畫あり。櫻の狂歌百首を載せたり。

一二八　狂歌四季遊　花見の部　彌生庵雛群選　一冊

花見の狂歌集にして、首に素眞の花見にちなめる畫あり。

一二九　狂歌畫像鯉鱗集　花之部　檜園梅明選　一冊

卷首に大江梅信以下十二人の狂歌作者の畫像を掲げ、作者の住所號等を記し、各〻花の狂歌一首づゝを載せ、後に地方の狂歌連の花の狂歌二百八十五首を集めたり。

一三〇　おも本篇傳　橘樹園北溪畫選　天保十年　一冊

名所の花の來歷と多數の狂歌を載せ、北溪の描ける吉野、隅田川の花見の圖あり。

一三一　ちもとの華　千首樓選　文化七年　一折

千首樓の序あり。編中に北尾紅翠齋、辰齋、北畫、雪旦、北馬等の花見の圖あり。櫻に關する狂歌を多く載せたり。

一三二　得吉方迺瀧　狂歌堂島人選　天保四年　一冊

狂歌堂島人の序あり。櫻と紅葉とを詠める歌數多を載せたり。

一三三　濤花集　戲吹歌園、戲樹園選　土佐相覽畫　文政十三年　一冊

櫻と春雨との狂歌を多く集めたるものなり。

一三四　櫻間狂歌集　綠樹園選　天保九年　一冊

阿波國名西郡櫻間の池の畔に碑を建て、古の名所を永く後世に遺さんとせる

同國の太守の美擧を賞揚して、櫻にちなみ作れる狂歌集なり。屋代弘賢、加茂季鷹其他の序あり。又碑石の全形、碑文、櫻間の池の景色圖を載す。

一三五　興歌手向花　嘉永三年　一冊

芍藥翁追福會の爲に選める狂歌集にして、獨櫻に限らざれども、櫻の歌五百首に達せり。編中に爲齋の畫あり。

一三六　花街名物　紅叢紫籙　黑川春村、村田文成選　其一畫　天保六年　一冊

櫻に關する狂歌を多く集め、處々に畫を挿めり。

一三七　花櫻狂歌集　三條茂佐彥　一冊

櫻の品種の名に就て詠める著者の狂歌集にして、上欄に簡單なる櫻の畫並に櫻の名に因める畫を掲げたり。

俳句

一三八　櫻花俳卷　享保十二年　一冊

訥子・蘭臺・貞佐・沾洲等の花の誹諧連歌三十六韻の外に、花の句二十二を載せたり。首に藤原氏女とみ筆の櫻の畫と沾洲の序あり。又翠竹散人の跋を附す。

一三九　櫻かゞみ　金龍山花王鑑　吉田魚川　享保十九年　一冊

享保年間淺草寺境内に櫻を植ゑたる時の俳句を集めたるものにして、昔より引用せられたる書なり。

一四〇　櫻勸進　石中堂斑象　寶曆九年　一冊

元祿の頃深川八幡社の境内に園女の植ゑたる歌仙櫻の後を繼ぎ、寶曆年間に再び櫻を植ゑたるときの俳句集なり。

一四一　さくら帖玉兎ゆき帖　寛政二年三年　一冊

櫻・月・雪の三部に分てり。櫻の部の判者は雪中庵完來、集者は山花人午心にして、寛政二年に成れり。花の句百二十二を載せたり。

一四二　花見次郎　井眉　寛政十二年　一冊

吉野の卷・初瀬の卷・嵐山の卷の三部に分ち、各〻俳諧の連歌竝に俳句を集め載せたり。獨花の句に限らざるも、櫻にちなみたるもの多し。

一四三　さくら會　文政十一年　一冊

嵯峨御影堂奉納の俳句集にして、宗匠として奇淵・天來・梅價、又執筆として昇左の名を載せたり。此書の外に時雨會・枯野會等の同樣の句集あり。

一四四　花供養　あし丸　一冊

芭蕉翁追福の法養を營めるときの花の俳句集なり。

一四五　花の賀　櫻井梅室序　一冊

梅室の序文と、八重櫻の口繪あり。俳句は櫻のみに限らず、廣く集めたり。

一四六　花　櫻（寫本）　二冊

蟹庵の選める櫻の俳句を載せたるものなり。年號なけれども、江戸末期なるべし。

一四七　題花櫻（寫本）　一冊

前書と同時にして、櫻の發句の催しを謠曲に作れるものなり。

一四八　華櫻集　教林盟社編　明治十年　一冊

櫻の俳句集なり。

七名所

吉野

一四九　新葉和歌集（寫本）　宗良親王　弘和元年　二冊

南朝の勅選和歌集と見るべきものにして、當時の吉野の櫻に關する和歌少からず。

一五〇　吉野百首　高臺寺藏版　一冊

文祿三年二月二十九日豐太閤の吉野に於て催せる歌の會の櫻の和歌を集めたるものにして、關白秀次、右大臣晴季、權大納言親綱、權大納言輝資、權大納言秀保、左近衛中將秀家、左近衛中將利家、侍從政宗等の外に法眼紹巴、法眼由己、法橋昌叱等の歌あり。執筆は織田常眞にして、各〻花のねかひ、花をちらさむ風、瀧の上の風、神の前の花、花の祝ひの五首を詠めり。此書は「續々群書類從」第十四にも收められたり。

一五一　詠二首和歌　里村紹巴筆　一幅

文祿三年豐太閤吉野觀花の時歌の會にて詠める花の歌四題の中の「はなのねがひ」と「たきのうへのはな」との二首を書きたるものにして、「吉野百首」に載せたり。

一五二　芳野新詠　荒井公廉　文政四年　一冊

吉野に關する著者の詩集にして、其中櫻を詠ぜるものあり。

一五三　芳雲餘情　第一輯　小野諄三　明治十七年　一冊

吉野の古跡竝に櫻に就て古今の詩歌を集めたるものなり。附錄として吉野山上の碑文を錄せり。

一五四　芳山風雅集　吉川法譽　明治二十一年　一冊

吉野に關する近世の詩人の作を集めたるものなり。

一五五　芳野勝咏　井上華　明治二十五年　一冊

吉野に關する著者の詩集にして、其中瀧櫻、布引櫻、雲井櫻等を詠ぜるものあり。

一五六　芳雲餘香集　西涯主人　明治三十四年　一冊

吉野に關する古人の詩、歌を集めたるものなり。

一五七　說南集　上編　辰巳長三郎　大正四年　一冊

吉野に關する今人の詩歌を集めたるものなり。

一五八　吉野山櫻の歌の口傳書　北村季吟筆　一幅

吉野山の櫻の古歌に就ての考證を認めたるものなり。

一五九　花の和歌　短冊　屋代弘賢筆

花のうたあまたよみける中に
櫻さくいつくはあれどみよし野の
よしのや春の都なるらむ

とあり。

一六〇　花の和歌　短冊　行誠上人筆　一枚

ふるさとゝ誰かいふらんみよしのゝ
よしのは花の都なりけり

行誠姓は福田、武藏の人、東京小石川傳通院、芝增上寺の僧正となり、次で京都知恩院の門主となる。明治二十一年寂す、壽八十三、和歌に巧なり。

一六一　吉野天人　（謠曲本）　一冊

吉野の花に關する謠曲なり。

一六二　芳山紀行　（寫本）　中井竹山　寶曆十三年　一冊

著者の吉野花見の紀行なり。竹山は享保十五年に生れ文化元年歿せり、享年七十五。此紀行は竹山の詩文を集めたる「奠陰集」にも載せず。文中に癸未とあるは寶曆十三年にして、竹山三十四歳の時なり。一行六人三月三日大坂を發し途中一泊、翌五日吉野に達せるに、恰も一目千本の花盛なり。滯留二日、史蹟を探り風景を賞し、八日塔の峰を過ぎ、奈良に至り、九日大坂に還れり。一行皆酒客なりしといへば、酣飲談笑の快想ふべし。著者が此文中に於て櫻を海棠となせるは、昔時の漢學者に普通なる謬見にして深く咎むるに足らず。此誤謬を正せる儒家には竹山の門人たる佐藤一齋あり。市橋星峰撰「花譜」の跋に於て之を說けり。世に和學者の作れる吉野日記の類は少からざれども、漢學者の筆に成れるものは稀なり。況んや一代の儒宗竹山其人の著に於てをや、啻に文墨の珍として世に傳ふべきのみならず、又當時の吉野の考證とすべし。

一六三　菅笠日記　本居宣長　二冊

明和九年に著者が吉野の花見に赴ける時の日記なり。

一六四　餌袋日記　本居太平　嘉永七年　一冊

明治九年著者が父宣長に隨ひ吉野に花見を爲せるときの日記にして、著者十七歳の時なり。出雲宿禰尊澄の序、著者の嗣内遠の跋あり。

一六五　吉野栞（寫本）　三熊花顛　寛政十三年版　一冊

寛政頃の櫻の愛護者且寫生家たりし三熊花顛の吉野花見の紀行にて、當時に於ける同地の櫻の有樣を知るを得べし。

一六六　よしの紀行　嘉栗　一冊

嘉栗と從者九郎の二人にて吉野の花見に行きたる紀行なり。文中に二人の狂歌を載す。

活字本にして、卷首に本書の原稿一枚を寫眞版として載せたり。

一六七　盛の花の日記　竹村尙規　享和元年　一冊

著者は本居宣長の門人にて、吉野の花見の日記なり。

一六八　芳野道の記　松花堂　寛政五年　一冊

松花堂が江月和尙を伴ひ吉野に赴ける時の紀行文を橘千蔭が模書し、之を白字に刻せるものなり。

一六九　芳野紀行　村瀨美　明治二十年　一冊

著者の吉野紀行にして、漢文にて作れる所と和文にて作れる所とあり。文中に圖を挿めり。

一七〇　芳野記（寫本）　飛鳥井雅章　高田與清舊藏　一冊

著者の吉野紀行にして、文中に和歌多し。上欄には註釋を加へたり。

一七一　芳野日記

氷室長翁　嘉永元年　一冊

吉野花見の紀行なり。卷首には大和國藥師寺にある舍人親王眞蹟を刻せるものを載せたり。

一七二　折々草　春の部　吉野山をいふ條

大田南畝自筆寫本　一冊

此書は建部涼袋の漫筆にして、春夏秋冬の四冊より成る。享和二年の作にして、從來寫本として傳はり、杏花園(蜀山人)の奥書あり。此寫本は右の書の春の部のみにて、卷末に享和二年神無月二十七日より二十九日までに寫す、とあれば、同書の成れる時直に寫し取れるものならん。書中に「吉野山をいふ條」とある所に、吉野の櫻苗賣に關する記事あり。此事は前に記せる三熊花顛の「吉野栞」に載せてあり、參照すべし。

一七三　芳野山獨案内　(翻刻本)

謠春庵　寛文十一年　三冊

古地誌の一にして、吉野の名所を記せる最も古きものなり。和歌多し。櫻に關する記事少からず。編中に古雅なる繪を挿めり。

一七四　大和めぐりの記

貝原益軒　元祿九年　一冊

編中に吉野の櫻に就て著者の觀たる所を記せり。元祿の當時に於ける同所の櫻の有樣を知るを得べし。

一七五　和州吉野山勝景圖

貝原益軒　正德三年　一折

吉野山の麓六田の渡より奥千本に至るまでの山上の有樣を寫せる圖にして、一々手にて彩色したるものなり。著者の序あり。圖の後に吉野山名所考の一編を添へたり。

一七六　芳野詣路乃枝折　梅亭金魚　嘉永三年　一冊

大坂より吉野に至るまでの路筋を道中記風に記せるものにして、諸所に繪あり。初に三吉野の春景と題せる彩色の繪を載せたり。

一七七　芳山花栞　曉鐘成　嘉永二年　一折

京都より大和めぐりの道中を案内記風に記せるものにして、殊に吉野に至る諸道を精しく擧げたり。又吉野山一眸圖を掲げ、一目千本より山上の櫻花の所在を示し、又詩歌を添へたり。次に芳山花時考と題して、古來吉野に來れる著名の人々の遭遇したる花の盛、早、遲の實例を一々擧げたり。

一七八　吉野山勝景繪圖　平井佐一郎　明治九年　一枚

小さき勝景圖にし櫻の所在を示せり。

一七九　吉野名所記　平井賣花翁　明治二十年　一冊

吉野の花候竝に名所舊蹟等の沿革を記載し、且大和の所々より吉野へ至る道路を記せり。前記の芳山花栞より取れるもの多し。

一八〇　よしの名所誌（第六版）　青涯主人　明治三十六年　一冊

吉野山の名所を古書等より抄記せるものなり。

一八一　吉野精華（第二版）　水木要太郎　大正四年　一冊

是も吉野の案内記にして、前者と大同小異なり。

一八二　吉野名所誌（第四版）　中岡清一　大正六年　一冊

吉野山中の名所の案内記なり。終に豐太閤吉野山登嶺記の一篇を載せたり。

一八三　芳野山　宮田青葉　大正六年　一冊

主として吉野の史蹟を記せるものなり。

一八四　吉野郡名勝寫眞帖　奈良縣吉野郡役所　大正六年　一冊

吉野郡中の名勝を寫せるものにして、畫の數四十五あり。

一八五　吉野山寫眞帖（第二版）　中岡清一　大正七年　一冊

吉野の山下より奥千本西行庵に至るまでの寫眞圖總計二十一を載せたり。其中櫻の風景を寫せるものあり。

一八六　芭蕉繪詞傳　中　蝶夢　寛政五年　一冊

吉野の一日千本の圖を載せたり。狩野正榮至信の原圖に基けり。

一八七　俳家奇人談　卷之上　玄々一　文化十三年　一冊

貞室の「これはくとばかり花の吉野山」の句の意を現はせる圖あり。鍬形紹眞の筆なり。

櫻川竝雨引山

一八八　櫻川事蹟考　石倉重繼　明治二十八年　一冊

櫻川の來歷に就ての考證、櫻川の名所及び櫻川に關する和歌を載せたり。

一八九　櫻川顯揚滿二十年記念句集　花笠庵　大正二年　一冊

昔の名所たりし櫻川の永く湮滅に附せられたるを慨し、之を顯揚せむが爲に著せるものにして、櫻川に關する諸家の談話、筆蹟、俳句等を載せたるものなり。

一九〇　櫻川觀櫻紀念寫眞　二十四枚

大正元年德川賴倫侯一行の櫻川觀櫻紀念の寫眞なり。

一九一　櫻川眞景繪葉書　一組

前記の紀念寫眞の一部を繪葉書に製したるものなり。

一九二　櫻川觀花寫眞　二枚

大正二年德川達孝伯一行の櫻川觀櫻紀念の寫眞なり。

一九三　櫻　川（謠曲本）　一冊

古き櫻の名所としての櫻川の謠曲本なり。

一九四　雨引山樂法寺眞景　一枚

坂東の札所たる同山の圖なり。山中に美麗なる山櫻多し。

一九五　妙智力　第三十號　大正二年　一冊

雨引山の櫻に就ての記事あり。

嵐山嵯峨東山等

一九六　嵐山風雅集　仁科白谷　天保十年　一冊

卷首に嵐山春景の圖を掲げ、次で著者の序文と、其遊嵐山記の一篇あり。冊中の詩は　平城天皇の御製を始め、菅原道眞、大江匡衡よりして近世に至るまでの作を集めたるものにして、此中嵐山の櫻に關するもの甚だ多し。

一九七　嵐山百題花　弘化三年　賀茂直兄　一冊

嵐山の四季の花其他に就しての和歌を集めたるものにして、此中櫻を詠ぜるも

の二百餘首あり。巻首に嵐山の風景圖を載せたり。

一九八　都花月名所　秋里湘夕　寛政五年　一冊

京都並に其附近の雪月花の名所を案内せるものにして、其中花の名所は御室、嵐山、華頂山、醍醐、花寺、鞍馬等を擧げたり。處々に圖を挿めり。

一九九　都花見往來　弘化五年　一枚

京都の花の名所を往來文風に綴れるものにして、一々の名所に就て花の盛りの日限を朱字にて現せり。表紙の袋には京都の歳時記を載せたり。

二〇〇　嵯峨嵐山之圖　一枚

嵐山滿花の全景を寫せる圖にして、上は大悲閣、下は渡月橋までの兩岸の名所を記せり。

二〇一　嵯峨の日ぐらし（古寫本）　冷泉爲村　一冊

著者の嵯峨の花見の記にして、未だ出版せられたるを聞かず。文中には和歌多く、又法輪寺の櫻を記せる所あり。

二〇二　花見日記（寫本）（著者自筆本）　常阿道筑　一冊

嵐山の櫻に就て作れる雅文にして、和歌多し。櫻の外に杜鵑、月、雪に就ても述べたり。

二〇三　妙法院宮嵯峨御遊覽記（古寫本）　伴蒿蹊　寛政二年寫　一冊

此篇は伴蒿蹊が妙法院宮一品親王（眞仁法親王、明和五年御誕生、文化二年寂）に供奉して嵐山の花を見たる時の紀行なり。文中に小澤蘆庵の歌も見えたり。文句は蒿蹊著「閑田文草」（享和三年版）巻の三、十七枚裏にある「某

宮嵯峨御遊覽記」と題せる一篇と大方同じと雖も、同文中には本文にある如き多くの詩歌無し。想ふに本文は蒿蹊の初の作にて、後に文句を改め「文草」中に收めたるものならむか。

本文の首には嵐山の渡月橋附近の著色圖を載せたり。

二〇四　嵐山花見の記（活字本）　熊谷直好　一冊

「嵐山花見の記」は、著者と阿元と二人が西山の花を見に行けるときの紀行にて文中に二人の和歌數多あり。文化六年三月の稿なり。此紀行の後に「花のあと」の一篇あり。著者が四月九日に佛光寺上人に從ひて香川景樹其他の人々と嵯峨に赴けるときの記なり。文中歌多し。

著者は景樹の門人にして、國家者なり。天明二年生、文久二年歿せり。周防の人。

二〇五　東山の花　雛屋立圃　一幅

東山の櫻に就ての句を書きたるものなり。

二〇六　醍醐の櫻繪葉書　一組

下醍醐三寶院の寺中の櫻の寫眞圖なり。

二〇七　御室山內四國順拜所細見圖　久富遠江守源文連在孝寫　天保三年　一枚

京都御室仁和寺境內の圖にして、多數の櫻の所在を示せり。

二〇八　嵯峨野の風景　廣重豐國畫　重國　三枚續

廣重の嵐山の櫻の遠景圖に豐國の人物を添へたるものなり。

隅田川

二〇九　隅田川櫻百首　中田顯忠　文久三年　一冊

隅田川の櫻を詠みたる歌百首を加藤千浪の書したるものなり。著者の序文あり。

二一〇　墨水看花詩册　植村蘆洲　明治四年　一册

隅田の花に就ての諸家の詩を錄せるものにして、大沼枕山の題辭あり。

二一一　隅田川叢誌　矢掛弓雄　明治二十五年　一册

隅田川に關する一般の名所を記せるものなるが、其中隅田の櫻に就ての沿革を記せる所あり。

二一二　墨水流燈會之記　言問主人　明治二十年　一册

隅田川の流燈會の記事なれども、卷末に墨堤植櫻之碑の一篇を載せたり。

二一三　隅田川堤櫻詩　石榻　龜田鵬齋　一幅

長堤十里白無痕、訝似澄江其月渾、飛蝶還迷三月雪、香風吹度水晶村、の一絶を楷書にて認めたるものなり。

二一四　隅田川櫻の歌　加藤千蔭筆　一折

「あらたまのとし立しより」の長歌竝に反歌二首を書せるものなり。

二一五　墨堤の夜櫻　染井吉野　鈴木華邨筆　一幅

墨堤の百本杭附近に染井吉野の滿開せる夜景を描けるものなり。

上野

二一六　花待ころ（寫本）　作樂園主人　一册

上野の花見の記なり。

小金井

二一七　小金井櫻樹碑文　一枚

小金井橋の傍に建てられたる碑文の摺本にして、挾南膝忠休明夫識、犀淵上條游子藝書、肥前守藤原義行朝臣題額とあり。元文の昔土地の奉行川崎平右衞門が幕命に依りて水道の兩側に櫻樹を植ゑたる來歷を記したるものなり。

二一八　同上　縮刻　一枚

前記の碑文を縮寫して彫刻したるものなり。

二一九　王花勝覽　露庵有佐　文化元年　一冊

內藤新宿邊より小金井に至るまでの順路を現はしたる圖並に途中の名所等を記したるものなり。

二二〇　小金井紀行（寫本）　文化五年　一冊

文化五年數名の俳人の小金井の花見に赴ける紀行なり。路すがら柏木の右衞門櫻を尋ね、今は朽木となりて無しと記せり。文中に俳句多し。終に「品川紀行」、「道の記」の二篇を添へたり。

二二一　遺愛花　文化八年　一冊

首に小金井の櫻の碑文と小金井橋の附近の櫻の圖を揭げ、小金井の櫻に關する諸家の詩を載せたり。其他櫻の俳句等あり。

二二二　夢路の花（寫本）　文化十二年　一冊

小金井の花見の紀行にして、和歌を挿めり。華者は南柯の痴樵とありて、何

人なるや明ならず。此紀行の外に「磯邊の梅」(杉田)、「桃の錦」(越ヶ谷)と題して、梅見・桃見の紀行を添へたり。桃見の記事には司直の句あり、成島司直ならんか。

二二三　西郊紀行（稿本）　原德齋　文政二年　一冊

德齋は志賀理齋の子にして、原念齋の養子となれり。此紀行は著者十七歳の時生父母と共に小金井に櫻を觀たるときの作にして、著者の自筆なり。

二二四　東京近郊圖　中田惟善　文政八年　一枚

圖中に小金井の櫻並木の所在を示せり。

二二五　武藏野小金井櫻順道繪圖　庭田敬之　明治十八年　一枚

東京より小金井に至る順路を示す繪圖なり。小金井の櫻の碑文、櫻を植うる記、其他櫻に關する俳句等を載せたり。

二二六　愛日樓文集　佐藤一齋　文政十二年　一冊

編中に著者の「小金井橋觀櫻記」の一篇あり。是れ文化三年一齋が林大學頭と共に小金井觀櫻の時の紀行文なり。

二二七　小金井保櫻會々則　大正三年　一枚

大正三年四月設立せる小金井保櫻會の會則並に役員名及び小金井に至る案内を記せり。

二二八　東京市公報　第八十六號　一冊

小金井の櫻花の沿革並に其優れたる品種、櫻の保護に關する東京市の事業を略記せり。

二三九　小金井の櫻の歌二首　加藤千蔭筆　一幅

けふゆきてわけなむ花のあらましに先あり明の月そにほへる

開わたる天のかはらかさく花の雪の中ゆく水のひとすち

の歌を書せり。

二三〇　日の出の櫻寫眞　三好學撮影　一枚

小金井の櫻の中にて最壯觀なる日の出の櫻の滿開の有樣を寫せるものなり。

二三一　小金井觀櫻紀念寫眞　四枚

大正三年四月小金井觀櫻の紀念として撮影せるものなり。

二三二　小金井の櫻「富士見百圖」中の一圖　廣重筆　一冊

小金井の櫻の並木の遠望圖なり。

二三三　同　三十六花撰中ノ一圖　立祥筆　一冊

一株の山櫻を描けり。

荒川（江北）

二三四　照代樂事　清水謙吾　明治二十四年　一冊

明治十九年東京府南足立郡江北村の荒川堤防に里櫻の品種七十九種を植ゑたる時の記事竝に之に關する詩文歌等を載せたるものなり。著者は同村の人にして、該堤防に里櫻の名種を植ゑたるは一に同氏の計畫に由れり。

二三五　荒川堤櫻花暦附觀櫻道案内　高木興吉　明治四十五荒　一枚

荒川堤に植ゑられたる里櫻の品種の名稱竝に其特徴を記し、又同所の略地圖

を附せり。

二三六　江北荒川堤五色櫻繪葉書　一組

荒川の櫻には花の色の種々なるものあるにより、俗に五色の櫻といへり。

二三七　江北荒川堤上の櫻の寫眞　二十二枚

江北堤上に植ゑたる里櫻の品種の樹形並に花形の寫眞なり。

其他の名所

二三八　甲州山高實相寺の神代櫻の圖　銅版　一枚

神代櫻は本邦第一の巨大なる櫻として知られたるものなり。此圖は實相寺の境内並に其櫻を銅版に刻せるものにして、且櫻に關する記事を載せたり。

二三九　同上繪畫「甲山峽水」中の一圖　山梨縣廳　明治三十九年　一冊

右の櫻の滿開せる有樣並に實相寺の門及び背景としての高山を木版着色畫として現せるものなり。

二四〇　同上寫眞　一組

實相寺の櫻を種々の方面より寫せるのなり。

二四一　同上繪葉書　一枚

二四二　駿州狩宿の賴朝下馬櫻　井出正春　大正六年　一幅

狩宿の櫻は山櫻の最も巨大なるものにして、賴朝の下馬櫻として著名なり。此圖は此櫻の立てる傍にある舊家井出正春氏の作れるものにして、樹の大いさを記し、又和歌を載せたり。

二四三　同上寫眞　一組

下馬櫻を種々の方面より寫せるものなり。

二四四　武州石戸の蒲櫻の圖　荒木探玉喜信　明治二十一年　一枚

埼玉縣石戸の蒲櫻は蒲の冠者範頼の紀念に植ゑたるものとして知られたり。此圖は蒲櫻の全景を示し且之に關する記事あり。

二四五　矢立の墨　乾　大橋義三　明治三十九年　一冊

編中に蒲櫻の略圖と、其記事あり。

二四六　玄同放言　瀧澤馬琴　一冊

編中に蒲櫻の詳細なる記事あり。華山の作れる圖を載せたり。

二四七　時雨の櫻の圖　月輪寺　一枚刷

京都府下葛野郡嵯峨村愛宕山月輪寺の時雨の櫻の柵内に樹てる有樣を描寫したる略圖にして、「法然上人親鸞聖人流され給ふとき殿下兼實公手づから植給ふ櫻なりされば櫻も御名殘をおしみ露の落ること時雨の如くなれはしくれの櫻と號給ふ云々」と記せり。

二四八　花之十文　橘樹圖　一冊

名所の櫻の來歷竝に之に關する狂歌を多く載せ、且北齋、北溪の圖を挿めり。前に載せたる「おも本篇傳」の著者と同人なり。

二四九　花迺家苟　牛井忠見　明治十一年　一冊

著者が伊豫今治より嵐山・吉野等の花見に趣けるときの日記にして、和歌を挿めり。

二五〇　美濃根尾谷の薄墨櫻の圖　一枚

巨大なる白彼岸櫻の寫眞圖なり。

二五一　霞間ケ谷の櫻（史蹟名勝天然紀念物第三卷第二號）　三好學　大正八年　一冊

美濃大垣より遠からざる霞間ケ谷を櫻の名所として記せるものなり。

二五二　同寫眞　一組

二五三　霞間ケ谷櫻繪葉書　一冊

二五四　めぐみの花　井上淑蔭　安政七年　一冊

河島堤に植ゑたる櫻に就ての和歌を集めたるものなり。

二五五　櫻花帖　同　上　一冊

河島堤の櫻を詠じたる諸家の詩を集めたるものなり。

二五六　東都名所花暦案内　一枚

江戸附近の花の名所を地圖に現せるものにして、其中櫻の名所をも載せたり。

二五七　花信風（寫本）　十千亭　寛政五年版　一冊

江戸當時の櫻の名所幷に名木の所在を擧げ、開花期を記せるものにして、首に寛政甲寅（六年）の花暦とあり。

二五八　花見のしをり　忍川舍　天保四年　一折

彼岸櫻七箇所、絲櫻十三箇所、櫻二十八箇所、淺黄櫻の五箇所の名所を擧げ

たり。

二五九　四季遊覽圖繪　みやびのしをり　きゞすのや則房畫　英泉　天保六年　一折

彼岸櫻四箇所、絲櫻八十八箇所、單櫻六十四箇所、八重櫻三十七箇所を擧げたり。其中に靑山長者ヶ丸の名あり。

二六〇　花鳥曆　天由　安政五年　一冊

櫻の名所二十八、八重櫻の名所十三を擧げたり。

二六一　武江產物志　常崎常正　文政七年　一冊

櫻の名所五十二を擧げたり。

二六二　鹽松勝概　上　岡千仞　明治二十五年　一冊

松島に關する漢文の記行なり。本文の前に鹽竈櫻の圖竝に略記あり。

二六三　飛鳥川十二景詩歌竝碑　金輪寺第十二世宥祕　安政五年　一冊

飛鳥山の名所を圖說せるものなるが、此中に櫻を寫せるものあり。

二六四　飛鳥山の花　齊藤正謙筆　一幅

齊藤拙堂の國詩にして、

きのふこすけふまたこすはあすかやま
はなのさかりをあたにすきなむ

とあり。

二六五　花の友遊山双六　重宣畫　一枚

上部に飛鳥山の花盛りの圖を添へたり。表紙は兩大師附近の絲櫻の圖を現せ

り。

二六六　各地櫻の名所案内　汽車汽船ポケット旅行案内　大正六年四月　一冊

附錄として全國七十四箇所の櫻の名所を記せり。

二六七　勿來關碑　石榻　加茂季鷹　文政五年　一幅

源義家の「ふくかぜを」の歌を書し、名所としての勿來の關趾に千歳集に入れる此古歌を記せる碑を建つることを記し、後に自己の狂歌一首を添へたり。

二六八　勿來關碑　石榻　筒井憲　嘉永四年　一幅

前記の碑の背面に彫刻せる文にして、建碑の由來を略記せり。

二六九　山莊碑　石榻　間宮士信　文化二年　二面

碑面には山莊碑、裏には間宮士信の朝妻櫻の由來を記せる文を刻せり。寶永年間遊女朝妻と云ふもの切支丹を信じ刑せられんとせるとき、獄邊の櫻樹を指し其開花を觀て死せんことを乞へり。官之を憐み乞ひを許すと。依て後世此櫻を朝妻櫻と呼べりと云ふ。

二七〇　不斷櫻碑　縮刷　山田直行　慶應二年　一枚

伊勢白子觀音の不斷櫻の傍に建てたる碑の文にして、四時開花する櫻にちなみて佛力を述べたるものなり。

二七一　不斷櫻附り間（謠本）　版行年代不詳　一冊

伊勢白子山觀音寺境内の不斷櫻の由來を謠曲に作れるものにして、都より勅

使下り不斷櫻を見に來れるとき漁夫に裝へる花の精に逢ひ問答する體を仕組みたるものなり。出版年代は明ならざれども、本の終に「右不斷櫻每年八月十八日於觀音寺會式能仕候直正本令開判者也三月日勢州白子觀音寺門前本屋北村氏」とあり。

二七三　十六日櫻しほり　宮脇通赫　明治四十二年　一冊

伊豫道後溫泉郡御幸村大字山越字櫻谷にある十六日櫻の來歷、傳說を記したるものにして、終に明治十一年に建てたる十六日櫻の碑文、同櫻の保存主意書、明治三十年に作れる孝子櫻之碑文を載せたり。

二七三　感孝櫻誌　田中道圓　明治四十二年　一冊

前記の山越なる龍穩寺の境內（本堂の前）に樹てる十六日櫻の由來記を載せ、此櫻に就ての古今の詠草を蒐めたり。和歌、詩、俳句數多あり。古人の作の中には冷泉爲村の長歌、短歌、釋明月の十六日櫻記、宇佐茂村の續十六日櫻記等あり。

二七四　溫泉郡御幸村大字山越古蹟櫻谷十六日櫻　山越不退寺孝子櫻保存會　一枚

十六日櫻の來歷、孝子櫻之碑、爲村卿の和歌等を載せたるものなり。

二七五　十六日櫻寫眞　一枚

二七六　同　繪端書　一枚

前記の龍穩寺境內の同櫻を示せるものなり。

二七七　柏木右衞門櫻　醉翁筆　一幅

右衞門櫻は古來著名の櫻にして、現時も尙後繼木あり。此圖は同櫻花の特色

を寫生的に現せるものなり。

二七八　瀧之川櫻圖　醉翁　一幅

江戸時代の瀧の川の或る山櫻を寫したるもの。

二七九　鹽竈櫻の圖　醉翁筆　一幅

鹽竈櫻（赤芽、白花、八重、大輪）を寫し、之に齋藤彦麿が

みちのくのちかの鹽竈近からは
うらこく舟のよりて見ましを

と讃せるものなり。

二八〇　須磨寺の若木の櫻の繪葉書　一枚

須磨寺の若木の櫻は源氏物語に因みて名づけたるものにして、古き木の株より絶えず新しき芽を生ずるによりて此名あり。現今にても此木は遺れり。

二八一　同上制札寫　木版　一枚

昔より若木の櫻の傍に建てたる壽永年間武藏坊辨慶の書きたりと稱する制札の文の寫なり。

二八二　同上繪葉書　一枚

二八三　同上扇面　一

二八四　石藥師義經櫻　竪畫東海道五十三次第四十五　廣重筆　一折

二八五　名所草木腊葉帖　名所櫻花五十七品貼付　江戸時代　一折

全國の名所より持還れる草木の小片を貼付けたるものにして、其中に各地の

櫻花五十七品を貼付せり。

追加

狂歌の部

狂歌葦垣集

燕栗園、四谷庵、龜玉堂選
嘉永元年　一冊

歌人葦垣仲住の追悼の爲に集めたる狂歌集にして、歸雁と雨中花とを兼題として詠めるものなり。卷首に尙古堂の序、仲住の歌、北溪筆、雁と櫻花の圖三枚を載せ、それより諸國より送り來れる歌千餘首と俳句十餘を收めたり。

俳句の部

花の翁

風化坊選
天明三年　一冊

靑蘿と選者の序に次で、芭蕉翁の畫像の上に翁の「木のもとは汁もなますもさくらかな」の句を書きたるものを掲げ、それより季吟、貞室、任口、湖春、北枝、万子、去來、丈艸、嵐雪、其角、野坡、許六、文考、越人以下希因に至るまで總計八十八人の花の句を載せ、更に尾張、美濃、三河、伊賀其他諸國の俳人の花の句、終に花の俳諧の連歌三十六韻を收めたり。此書の外に同人の選める「雪の翁」一冊ありて雪の句を集めたり。

大正十年五月十日印刷
大正十年五月十五日發行

著作者　三好學
京都市上京區寺町通二條南入十九番戸

發行者　山田直三郎
東京市牛込區榎町七番地

印刷者　竹内喜太郎
東京市牛込區榎町七番地

印刷所　日清印刷株式會社

著作權所有

發行所　美術書肆　合名會社　芸艸堂
京都市寺町二條南
長電上二九〇番、振替大阪二五八番

發行所　美術書肆　芸艸堂支店
東京市本郷區湯島一ノ一
長電下谷七五三〇番、振替東京四〇九四〇番